

パーテンによる遊び発達の考察

— 小学校1年生の場合 —

1. 目的

言葉と遊びが発達のエージェントとして機能している幼児期において、遊びの質的発達の順序と方向性を明らかにすることは、この時期の発達段階の特徴をとらえ、教育的実践的に指導しようとする観点から重要な意義がある。そこで、本研究は Partenの研究を手がかりとした社会性発達の観点、およびPiagetの理論をもとにした機能発達の観点により幼児期の遊びをとらえ、その質的発達の順序と方向性を明らかにしようとするものである。とくに今回の調査は、2歳児より6歳児までを対象とした前調査に引き続き、7歳児の遊びを対象とし、幼児期より児童期へ移行する契機となる小学校入学を境に遊びの質がどのように変化するのか、前回のデータと比較検討したものである。

2. 方法

昭和61年9月中旬より12月上旬にかけて、神戸市の公立小学校1年生児童男子17名女子14名を、第2校時後の休み時間（午前10時25分～10時45分 一日で一番長い自由遊びの時間である）の遊びについて調査した。

社会性発達の観点はM.Partenにならい、①なにもしていない行動、②ひとり遊び、③傍観的行動、④並行遊び、⑤連合遊び、⑥協同遊びの6項目に分類した。機能発達の観点はJ.Piagetの理論をもとに ①運動遊び、②物での遊び、③言葉遊び、④初期ごっこ遊び、⑤構成遊び、⑥役割遊び、⑦ルール遊びの7項目に分類した。

休み時間の運動場での遊びを、社会性発達の観点6項目および、機能発達の観点7項目により分析し、一人平均40回、延べ1220回の観察記録をとった。

3. 結果

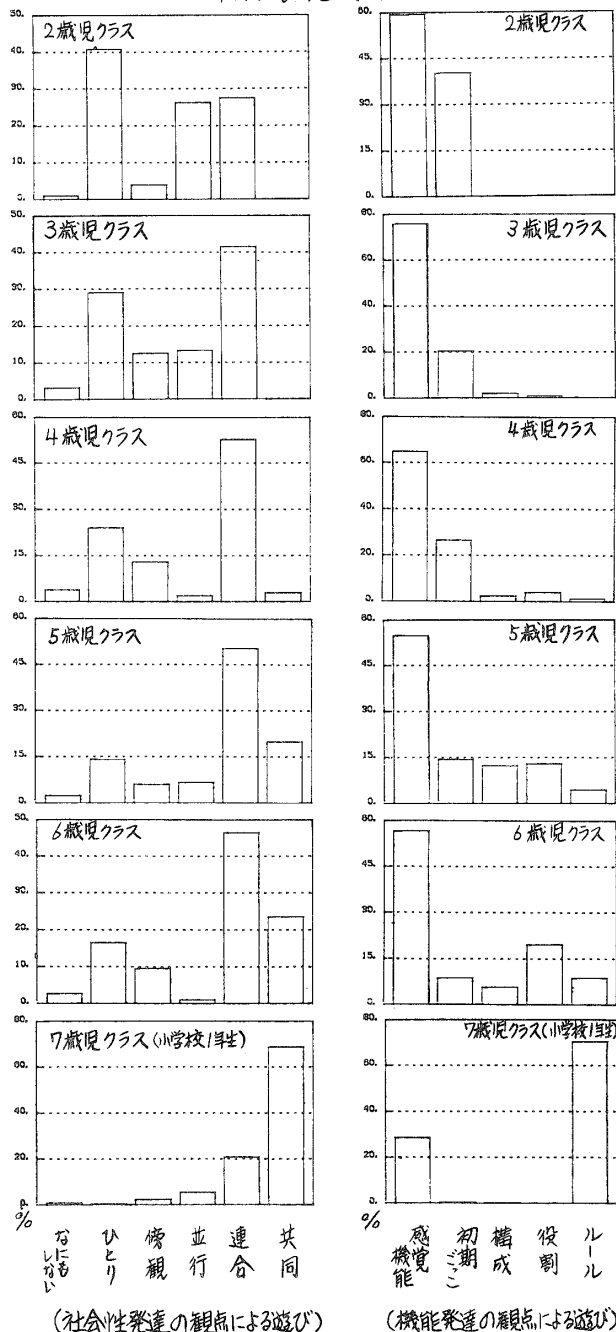
「社会性発達の観点による遊び」および「機能発達の観点による遊び」の調査結果は、右のグラフのとおりである。

4. 考察

① ひとり遊びと社会性の発達

幼児期の遊びは、調査の結果からも明らかにされたが、年齢の進行に伴い、確かにひとり遊びから並行遊

平本 秀範（神戸市立成徳小学校）



び、連合遊び、協同遊びへと発達していく。その意味から、ひとり遊びが食いち社会性や認識適応の指標であると論じることができる。しかしながら、ひとり遊びの一部は、年齢が進んでも残されている。その内容も質的に変化し、感覚機能遊びの中で、鉄棒やなわ跳

びの練習遊びとなったり、構成遊びの中で工作遊びとなったりする。教育的目的指向的な遊びへと変化していくひとり遊びを考えるなら、ひとり遊びのすべまが、かならずしも食いや社会性や認識適応の指標ではあり得なくなる。ひとり遊びの内容を考慮して判断するという条件を付加することが重要な意義をもつことになる。

本調査の結果において、7歳児(1年生)のひとり遊びは0.4%しか観察されなかった。20分に限られた休み時間、遊びより体育が重視される運動場、大半の時間を教室で一緒にすごすことから生じる仲間意識、これらの条件は、初期ごっこ遊びを促したり、構成遊びを成立させたりする方向に働くよりもむしろ、なわ跳びや鉄棒による感覚機能遊び(物での遊び・運動遊び)もしくはボールによるゲームや長なわ跳びなどのルール遊びを進める方向に働いている。なわ跳びや鉄棒遊びは、制約された場所で同じようにして遊ぶことから、ひとり遊びとしてではなく、並行遊びとして分類されている。

並行遊びに分類されているものの中には、ひとり遊びに近いものも含まれていると考えられる。また、みんなと一緒に長なわ跳び(ルール遊び・協同遊び)をしていて突然一人で列から離れ、短なわ跳び(物での遊び・ひとり遊び)をし、またみんなと一緒に長なわ跳びを続けるというような事例も観察されている。7歳児においてもひとり遊びは残存していると考えられる。

② 遊びの内容を変化させる要因

本調査で明らかになったことであるが、保育所、幼

稚園時代に比べ1年生の協同遊び(68.9%)ルール遊び(70.7%)は飛躍的に増加している。学校生活の中心である授業で長時間共に活動することを繰り返すことから来る学級仲間としての意識や、空間的、時間的制約は、ひとり遊びを許さない方向に働きかける。授業中の活動や学校生活により言語活動が活発になる。並行遊びも、誰かが話しかけ応答することにより連合遊びに変化する。1年生から6年生までが混じりあって一緒に運動場で遊んでいることから遊びを模倣し、質的变化をきたす。とくに協同遊び・ルール遊びは仲間意識を基盤にして、年上の子供たちのゲームを模倣することから急激に増加していく。担任も学級経営の施策として、「仲よくする」ことを常に実践させる。体育や休み時間に新しいゲームを指導しながら一緒に遊ぶ。その遊びを子供同士で模倣する。協同遊び・ルール遊びはますます増加していく。

5. まとめにかえて (遊び発達の順序と方向性)

下図に示すように、幼児期の遊びは現実適応として実生活に向って終結する部分と、自由で自発的な、それ自体を楽しみ、それ自体で終結し、遊びつくされ完結する部分との二側面により各位相は構成されている。幼児期の遊びは、それ自体終結してしまうものであり、終結することにより次の位相へと発達していくものである。それゆえに、幼児期においては、それぞれの位相の遊びを豊かに充実させ、play outさせることにより現実的な社会の適応のための豊かな土壌をつくりあげることができるとであろう。

